

曲目解説

◎ベートーヴェン(1770～1827)の弦楽四重奏曲

ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は全部で16曲ありますが、作曲年代からいくつかのグループに分けることができます。

1798年～1800年頃	第1番～第6番	初期の作品。ハイドンやモーツァルトの影響がみられる。
1806年	第7, 8, 9番 (ラズモフスキー四重奏曲)	中期の代表的な作品、ベートーヴェン独自の手法。
1809, 1810年	第10番, 第11番	中期とも後期とも異なる独特の様式。
1823～1826年	第12番～第16番	後期の作品、室内楽における最高の境地を極めている。

比較のために交響曲の作曲年代と、ついでにウィーンに関係する世界史的なできごとを挙げてみます。

		1789年	フランス革命勃発
1799～1800	第1番	1800年	マレンゴの戦いでオーストリア軍がナポレオンに敗北
1801～1802	第2番		
1803～1804	第3番	1804年	ナポレオンの帝政宣言
1806	第4番	1805年	三帝会戦でハプスブルク家がナポレオンに屈服
1807～1808	第5番		
1807～1808	第6番	1809年	ナポレオンがウィーン入場
1811～1812	第7番	1812年	ナポレオンがモスクワ遠征で敗北
1811～1812	第8番	1813年	ナポレオンの失脚
1822～1824	第9番	1814年	ウィーン講和会議 (ナポレオン後の欧州の秩序を議論)

●弦楽四重奏曲 第2番 ト長調 Op.18-2 「あいさつ」 約21分

第1楽章	Allegro	ト長調	4分の2拍子
第2楽章	Adagio cantabile	ハ長調	4分の3拍子
第3楽章	Allegro	ヘ長調	4分の3拍子 Scherzo 楽章
第4楽章	Allegro molto quasi presto	ト長調	4分の2拍子

タイトルの“あいさつ”は第1楽章の第1主題が、あたかもあいさつを交わすように聞こえることから後世につけられたものです。



ハイドン、モーツァルトの弦楽四重奏曲では第1楽章が最も重要で、終楽章は軽快なロンドなどで終わることが多いですが、ベートーヴェンのこの曲では終楽章が最も充実していて全曲の重心となっています。

●弦楽四重奏曲 第11番 へ長調 Op.95 「セリオーツ」 約21分

- 第1楽章 Allegro con brio へ短調 4分の4拍子
- 第2楽章 Allegretto ma non troppo ニ長調 4分の2拍子
- 第3楽章 Allegro assai vivace ma serio へ長調 4分の3拍子 Scherzo 楽章
- 第4楽章 Larghetto-Allegretto agitato へ短調 4分の2拍子 - 8分の6拍子

タイトルの“セリオーツ(まじめな、厳粛な)”はベートーヴェンの自筆譜に書かれている言葉です。また第3楽章の発想記号に *serioso* がついています。

4本の楽器のユニゾンで奏される第1楽章冒頭の旋律はとても耳に残ります。



第4楽章の主部はとても Catchy な旋律で始まります。



●弦楽四重奏曲 第8番 ホ短調 Op.59-2 「ラズモフスキー第2番」 約31分

- 第1楽章 Allegro ホ短調 8分の6拍子
- 第2楽章 Molto Adagio ホ長調 4分の4拍子
- 第3楽章 Allegretto ホ短調 4分の3拍子 Scherzo 楽章
- 第4楽章 Presto ホ短調 2分の2拍子

ラズモフスキーは第7番、8番、9番が献呈されたラズモフスキー伯爵（ウィーンに駐在していたロシア大使）の名前です。ラズモフスキー伯爵にはヨーロッパ中に名を知られた有名な弦楽四重奏団が召し抱えられており、伯爵自身が第2ヴァイオリンを弾いていました。初演もこの団体によって行われました。

第3楽章の中間部にはロシア民謡の旋律がフーガ形式で使われています。



この旋律はムソルグスキーのオペラ“ボリス・ゴドノフ”の中にも次の形で登場しています。



ラズモフスキーはベートーヴェンから弦楽四重奏曲を献呈された人として記憶されていませんが、実は1792年からロシア大使となり、ナポレオンによる動乱でのロシアの権益確保に努め、1814年のウィーン講和会議でもロシアの首席代表になっている政治的に重要な人物でした。